

令和 2 年 9 月 9 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K08185

研究課題名（和文）緑地環境ユニバーサル化にかかる合理的配慮を支援する人材のあり方とその養成システム

研究課題名（英文）Development of educational program on universal access for staff of parks and outdoor recreation sites

研究代表者

美濃 伸之（MINO, Nobuyuki）

兵庫県立大学・緑環境景観マネジメント研究科・教授

研究者番号：00336835

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、緑地環境ユニバーサル化のための合理的な配慮を支援できる人材を養成すべく、そのためのカリキュラムを作成、実際の運用を通して、有効性を検証した。その結果、現役社会人の参加にあたっては、業務への関連付けに留意が必要であり、内容については基礎理論とともに実技・体験が重要であった。また、それぞれの職域での工夫内容を十分に踏まえながら、一般コースとのコンフリクトやコストの問題など、現実的な問題をどのように解決すべきかに関する議論も効果的であった。また、職員の関心が高い防災にかかる勉強会を発足させ、ユニバーサル化教育の主流化を試行した結果、参加者からの参加意欲が高まり、継続運用へ効果的であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、公園緑地での障害者利用をソフト的に支援できる人材の養成について検討した。国内の公園緑地においては、障害者等への支援方法が施設整備によるものに偏重しているため、現場には上記のような対応ができる人材が少ない場合が多い。ここでは、これら公園緑地の現場における研修ニーズに応えようとする研究であり、具体プログラムの試行も行っているため、社会還元が容易な知見であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of research is to discuss an effective educational programs for staff of parks and outdoor recreation sites. This research had two objectives: (1) identify requirements of training course suit for staff of parks and outdoor recreation sites, (2) test feasibility of educational program. Findings of the study are as follows. Most experiences of staff trainings were in-house training where an external lecture is brought in or an enterprise employee provides instruction. Most of complains about training programs were usefulness of the actual business. Demands of knowledge related to human health, accessible design, health care and stress mitigation were matters of concern. Requirements of schedules and contents were basic introductions, advanced specific applications, field trips and opportunity to enhance experience by working were desirable. Training programs conducted as the courses of Awaji landscape planning and horticulture academy was almost success.

研究分野：ランドスケープ科学

キーワード：公園緑地 バリアフリー ユニバーサルデザイン 教育 人材養成

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

長寿化の急速な進展に伴い、高齢者や障害者等にも利用しやすい緑地環境のユニバーサル化が急務となっている。そこでは、景色を楽しむ、身近な自然について学習をするといった野外活動プログラムが如何に多様な人々へ偏りなく提供されているかが最大の関心事となる。このようなプログラム主体のユニバーサル化を推進するには、いわゆるソフト支援を含めた多様なアプローチをその環境や状況に応じて柔軟にコーディネートする合理的な配慮が欠かせない。しかしながら、国内の緑地環境においては、ユニバーサル化を実現する方法が施設整備に偏重し、それにかかる専門性は空間デザインを提案できる能力であると理解されてきたため、緑地環境の現場には上記のような課題に対応できる人材もしくは支援が得られない場合が多い。緑地環境においても福祉系専門家や関連団体に助言を求めることも増えつつあるが、プログラムそのものを必ずしも熟知していないため、不具合を指摘するにとどまり、具体的な改善策を見出すには至らないケースも少なくない。このように、現状の緑地環境ユニバーサル化においては、多様なアプローチから成る合理的な配慮が急務であるにもかかわらず、それを推進する人材が整わないため、現場では担当者が試行錯誤の上、事態に対応せざるを得ない現状にある。

2. 研究の目的

本研究では、緑地環境ユニバーサル化のための合理的な配慮を支援できる人材（ユニバーサル化・コーディネータ）を養成すべく、緑地環境プログラムにおいて生じるバリア特性の理解、およびユニバーサル化のための合理的配慮への理解を基礎要件とし、人材養成のためのカリキュラムを作成、それを社会人対象の公開講座として実際に運営し、その有効性を検証する。講座運営の実践記録からは、受講生リテラシーの差異など幅広い受講者を対象とする上での問題点を中心に課題を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、以下の3つの方法により目的を達成する。

1) 社会人教育に関するニーズ調査

公園緑地分野においては、福祉領域の知識やスキルが現場にて必要となっているものの、これらを現役社会人の方々にどのように学んで頂くかについては未だ十分な議論がなされていない。そこで、具体の教育システムへ向けての緒として、公園管理に携わる現役社会人を対象にしたアンケートにより、健康福祉分野の研修ニーズを把握した。対象は国交省公園緑化研修参加者（国または全国の自治体公園行政担当者）および国営海の中道海浜公園職員あわせて76名であった。いずれも著者が行う講義の際に配布したアンケートにその場で記入していただき、直接に回収をした。調査項目は、対象属性とこれまでに受けられた研修について、研修と大学との関わりについて、健康福祉ノウハウについて、望ましい研修スタイルについて、である。いずれもアンケート回収率は100%であった。

2) 受講生属性に配慮した公園緑地バリアフリー講義のあり方

公園緑地分野におけるバリアフリー講義および演習を学部学生、現役社会人、生涯教育受講生を対象に実施し、属性別に講義アンケートを実施、その自由記載内容の比較を通して、当該分野におけるバリアフリー教育のあり方を考察した。対象とした具体の受講生は、兵庫県立大学学部1年（21名）千葉大園芸学部3年（15名）、淡路景観園芸学校専門講座都市公園マネジメント受講生（13名）、淡路景観園芸学校園芸療法課程受講生（15名）である。なお、学部1年生向け講義は共通教育、学部3年生向け講義は造園デザインの専門教育の一環として実施されているものである。また、専門講座都市公園マネジメントは、公園管理の実務に携わる社会人向けの講座である。さらに、園芸療法課程は、園芸を医療福祉分野で活用しようとする人向けの講座であり、

40代～60代までの層が主となっている。講義アンケートはすべて講義終了後に実施しており、記入時間は15分程度で、印象に残った内容を記載してほしい旨を伝えて記入をいただいた。なお、講義の内容は車いす体験を含んだバリアフリーに関連する内容の概説であり、空間を中心としたバリアフリー事例、法体系やガイドライン、海外との比較、情報提供、ソフト支援といったものが含まれている。

3) 公園緑地バリアフリー教育の継続運用について

ここでは、国営海の中道海浜公園に所在する複数の機関の職員を対象にした勉強会形式による試行を実施し、その結果や事後の担当者との協議から、その継続的な運用について考察した。

4. 研究成果

1) 社会人教育に関するニーズ調査

これまでに受けた研修の実態、研修に参加する基準、研修への不満についての結果を図1に示す。まず、これまでに受けた研修では、社内研修等が大半を占め、職場からの推薦などが必須であることが分かる。また、研修に参加する基準を見ても同じことが読み取れるほか、場所や日時も大いに考慮する必要がある。また、研修への不満を見ても、内容と現場との乖離状況に関するものが多く、職務にどのように関連づけていくのかが最重要であると考えられる。

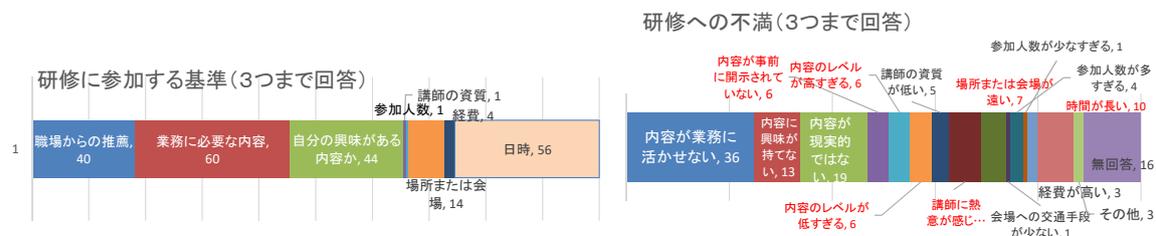


図1. これまでに受けた研修について

大学に期待することに関する結果を図2に示す。ここでは、教員が有する専門知識が期待されることはもとより、学生の参加への期待が大きいことが読み取れる。特に、柔軟な発想や行動力が期待されていた。一方で、問題意識が共有できない、遊び半分になってしまいがち、大人数になってしまう、議論に深みがでないなどのマイナス面を指摘する声もあり、配慮する必要がある。また、望ましい研修スタイルについては、自らの緑環境あるいは同業他社に出向くスタイル、内容は基礎理論、先進事例、実技・体験、時間は半日～1日が望まれていた(図3)。

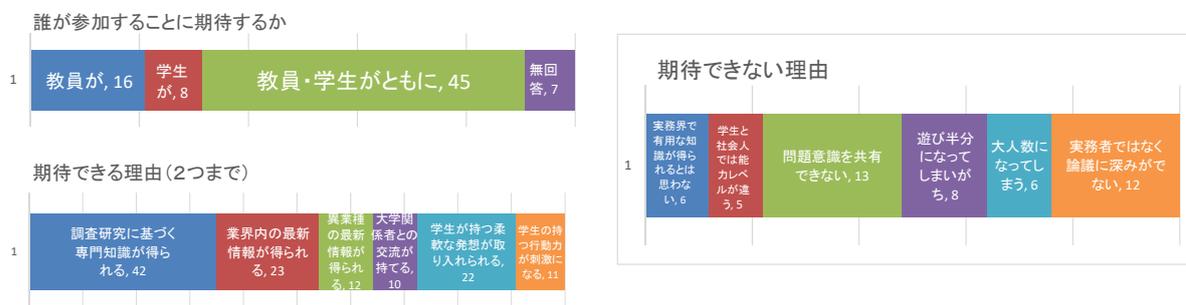


図2. 大学に期待すること



図3. 望ましい研修スタイル

2) 受講生属性に配慮した公園緑地バリアフリー講義のあり方

1年次共通教育においては、車いす体験の印象に関する数多くの記載が見られた。共日常空間の中にもいろいろな工夫がなされてあること、見てすごいと感じるものと真に有用なものとの違いなどに関する記載が多かった。3年次の専門教育においては、空間デザインを志向している学生が多いためか、他要素とのコンフリクトなどに関心が高かった。車いす体験も、自身の気づきというものもあるが、普段はこういう風に良いと見ていた空間が別の観点から必ずしもそうではないといったようである。気づきよりも、どのような問題があり、どのように解決していこうとしているのかといったことへ関心が高い傾向が読みとれる。3年次ではバリアフリー一辺倒のものよりも、専門領域における他講義等を踏まえながら、講義内容を検討する必要がある。社会人向けでは、進め方や職務との兼ね合いに関する記載が多かった。内容的な要望では他公園での事例や工夫を教えてほしいといった事柄が多かった。また、接遇面での要望も多く、施設が古く、お金もない場合はどうかなどもあり、それぞれの職域での工夫内容を十分に踏まえることは重要であると考えられた。一般ユースとのコンフリクトやコストの問題の指摘も多く、学部3年次専門教育と同様な傾向であった。生涯学習では、いままでの経験と足し合わせて理解が進んでいる様子が伺えた。身近な経験談に関する記載も多く、身近な施設紹介も効果的であった。一方で関心の薄い人も一定割合おられ、要点をまとめることも重要と考えられた(図4)。

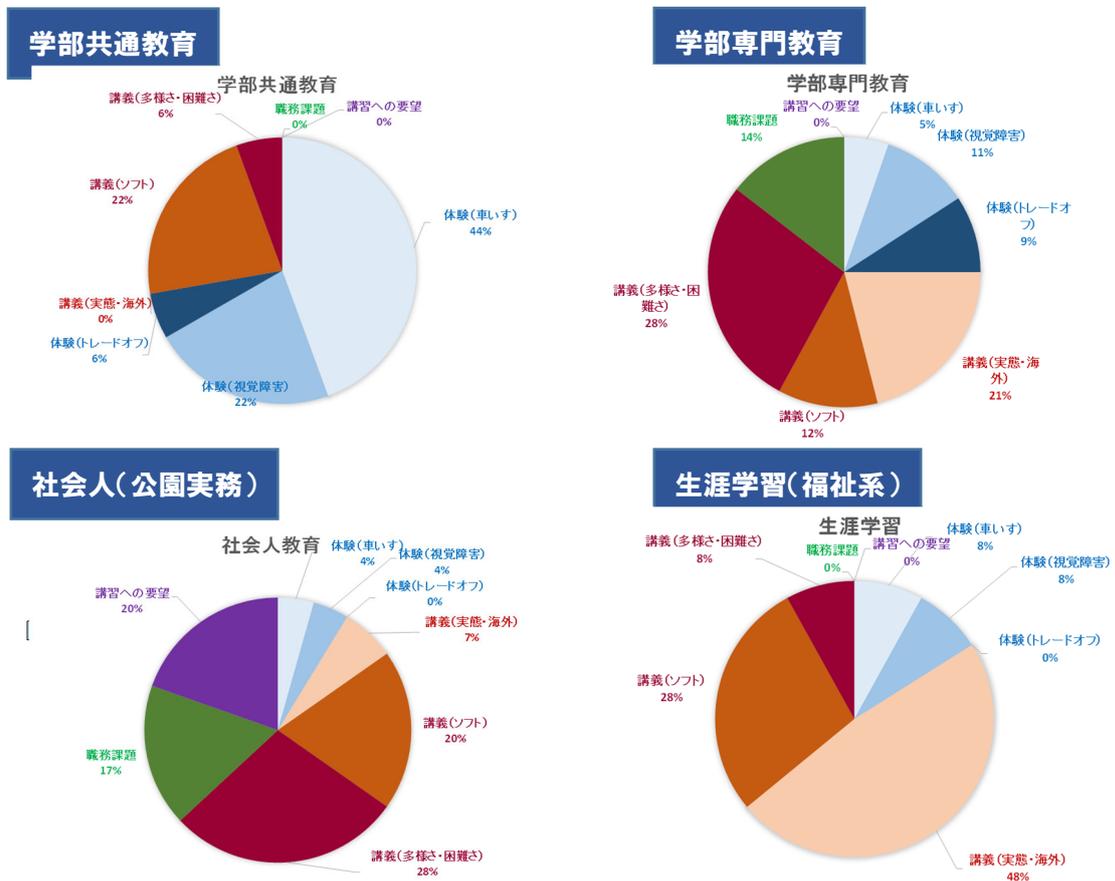


図4. 受講生属性による講義後アンケート記述の差異

3) 公園緑地バリアフリー教育の継続運用に向けて

国営海の中道海浜公園内には公園管理センターのほか水族館、ホテル、青少年海の家など関連する6つの施設が存在し、協働して公園管理運営を実施している。ここでは、ユニバーサルデザインの取組を協働で、かつ持続可能な範囲で推し進めていく方策を検討するため、6つの機関でそれぞれに実施している取組を把握・整理することで、どのような共通項が見いだせるのか検討した。また、6機関による意見交換会において関心が寄せられた防災については共同のワークショップ・勉強会を実施し、それらにおけるユニバーサルデザインの意味合いについて考察した。職員の関心も高い防災にかかる勉強会を発足させ、その運用のなかで教育の充実を図ることを試行した結果、参加者からの参加意欲が高まり、ユニバーサルデザイン教育の継続運用へ効果的であることが確認できた(図5、図6)。

| | | |
|-----------|--|--|
| 目的・テーマ | 各機関が興味のある課題をテーマとした勉強会を継続に実施し、各機関自然災害の多発、訪日外国人の増加等により、訪日外国人など防災情報を得にくい人々への対応のあり方について学び、各機関業務への一助とする。 【全体テーマ】: 防災情報のあり方とそのユニバーサル化について | |
| 実施内容 | ①美濃先生挨拶、趣旨説明(15分) ②講演 テーマ:「福岡市の防災・減災～覚えておく災害への対応～」 講師:福岡市 市民局 防災・危機管理課 小田係長、西田係長(90分) ③勉強会の振り返り(アンケート、感想)(20分) | |
| 参加者意見(感想) | <p>【良かった点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○1回目としては良かった <ul style="list-style-type: none"> ・初回にしてはよかった ・意外と知らないことが多かった ・有用な情報を具体的に示してもらった ○次回も参加したい ○有用な情報が多かった <ul style="list-style-type: none"> ・有用な情報が多かった ・アプリなど具体的な情報があった ・ハザードマップ等、身近に感じた ○情報をどう伝えるべきか考える機会となった ・公園のリスクが分かった ・利用者への情報のあり方について考えることができた | <p>【改善点(今後の取り組みに向けて)】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○今後の勉強会テーマを考える必要がある <ul style="list-style-type: none"> ・各機関で取り組み内容が異なる ・次回は具体的な内容にしていく必要がある ・テーマを決めて進める必要がある ○防災情報の活用方法 <ul style="list-style-type: none"> ・アプリ等の応用 ・外国人や障がい者への情報発信 ・利用者ごどのように情報を伝えていくか ・地域性を考えた情報発信のあり方 ・避難後の誘導 ・情報の有効活用 ○リスクの対応をどこまで考えるべきか <ul style="list-style-type: none"> ・どこまで責任を持つのか ・リスクを考えた対応 ・最悪を想定した対応 ○ケーススタディを行い具体的なアクションに変えていきたい ○トータル的にスタッフのサービス向上につなげていきたい |

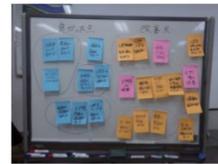


図5. 公園管理スタッフを対象とした防災にかかる勉強会・ワークショップ

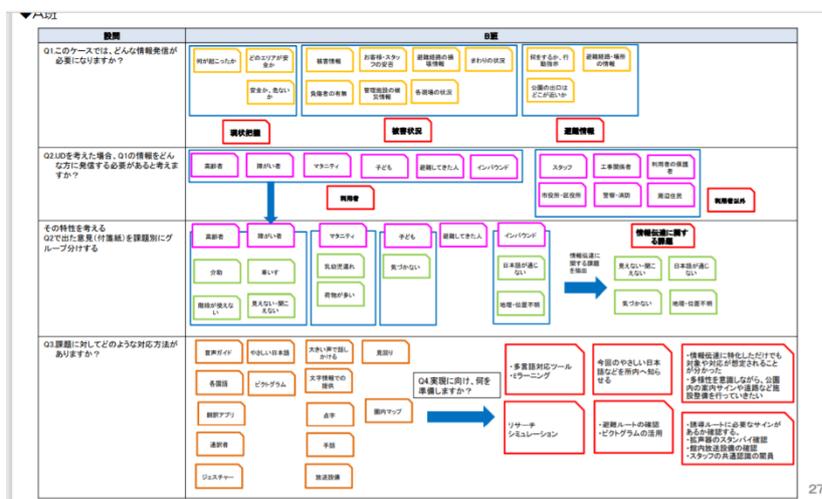


図6. ワークショップ結果の一部

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 美濃伸之 | 4. 巻 45 ~ 48 |
| 2. 論文標題 花と緑を楽しむユニバーサルデザイン（第1回～第4回） | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 兵庫県園芸・公園協会 花と緑のまちづくりセンター | 6. 最初と最後の頁 1 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 美濃伸之 | 4. 巻 19 (3) |
| 2. 論文標題 福祉のまちづくりと景観・造園 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 日本福祉のまちづくり学会 | 6. 最初と最後の頁 60-61 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 美濃伸之 |
| 2. 発表標題 移動障害当事者のバリアフリー情報収集の実態と公園緑地の開示情報の関係性 |
| 3. 学会等名 日本福祉のまちづくり学会全国大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 美濃伸之 |
| 2. 発表標題 みどり与健康福祉の社会人教育に関するニーズ調査 |
| 3. 学会等名 日本福祉のまちづくり学会全国大会 |
| 4. 発表年 2017年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------|---|--|----|
| 研究 分担 者 | 嶽山 洋志 (TAKEYAMA Hiroshi) (40344387) | 兵庫県立大学・緑環境景観マネジメント研究科・准教授 (24506) | |